

29E16-am07

血清 CRP (C-reactive protein) 値及びアルブミン値からみた切除不能進行膵臓癌患者の予後予測についての検討

○西川 千晶¹, 今津 邦智¹, 中田 恭子¹, 重村 裕¹, 菅原 賢¹, 濱井 宏介², 山内 理海², 土井 美帆子², 高岡 正宣¹, 篠崎 勝則²(¹県立広島病院薬, ²県立広島病院臨床腫瘍)

【目的】膵臓癌患者は悪液質に至る頻度が高く、極めて予後不良である。近年、悪液質に IL-6 (interleukine-6) が関与し、更に IL-6 と CRP (C-reactive protein) は相関性を持つことが明らかとなった。一方、炎症性サイトカインは栄養評価指標となる Alb (albumin) 合成を抑制する(図 1)。今回、我々は初回診断時の CRP・Alb 値を指標に患者を分類し、OS (Overall survival) との関連性を解析することで、予後予測因子となりうるかを検討した。

【方法】2009/10~2011/11 で Gemcitabine and/ or TS-1 を実施した 28 例の切除不能進行膵臓癌患者を対象に、Glasgow Prognosis Score を改変した三木らの方法に基づき CRP・Alb 値から患者を 4 群に分類し(図 2)、OS を Log-Rank 検定にて retrospective に解析。

【結果】患者は A・B・C・D 群(n=12, 0, 11, 5)に分かれ、OS は A>C>D 群の順に有意に短縮した(図 3)。また、診断時に有意な体重減少を認めた群でも OS は有意に短縮した。

【考察】CRP・Alb 値より、診断時に予後不良の患者群を予め発見できる可能性が示唆された。不可逆的な悪液質状態をきす前からの、炎症性サイトカインを抑制する栄養食品や薬剤の併用が予後に影響する可能性もある。また、本会では化学療法の効果予測因子としての側面から当指標の意義を報告する予定である。

